

Title	K. Asakawa: The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan
Sub Title	
Author	間崎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.4 (1915. 4) ,p.473(109)- 475(111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150401-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リ氏の到達したる結論の當否は暫く之れを措く。分配論の範圍を以て、地代、賃銀及利潤の三社會階級所得に限定し、其比例的な研究を以て分配論の本體と爲したることは彼が空前の創見にして、其識見の時流を抜くこと大なるを證するに足る可し。實に、リカルド一度出で、我經濟學は初めて Wages per head, Profit percent, Rent per Acre 以外更に重要な比例的分配の存することを知れり(キヤナン前掲書三二九頁)リ氏の所論は客觀的抽象的に論じ、勞働價值原より續釋して分配行程に及びたる結果、實際事實の説明に欠陥ありとの非難は辭す可からざる所なれども、今日の分配論に於て取扱はるゝ所のもの、多くは彼れの與へたる問題と其範圍とを出でず(續經濟學講義二〇頁、アール前掲書第二卷五〇六頁)

批評と紹介

The Nation's Wealth Will it endure ?

By L. G. Chiozza Money

千九百十四年 倫敦 發行
小形二百六十四頁東京價五十圓

歐洲大混戦の初期に於て獨逸が其西討東伐の軍略に失敗して以來同盟側並に協商側は共に持久の策を講じつゝあるもの如くなるが、若し果して然りとせば各交戦國の富力は戦争の結局に一大影響を及ぼすものなりと云はざる可からず。本書は交戦國中に於て最も富めりとの評ある英本國の富力に關する綿密なる統計的研究を載せたり。著者が本書の稿を了りて上梓せるは昨年の春期にして従つて著者の見地は今次の大戦亂とは没交渉なるも、著者の引用する統計數は戦争に對する英國の耐久力如何を知らんと欲する者の參考に資する所尠からず。

本書其物の目的は英國の富の基礎甚だ薄弱なる所以を説きて國民を覺醒せんとするに在り。著者論旨の要點は左の如し「英國が巨大の富を生産し之を蓄積するに至りしは近代の、

となり。百五十年前には人口比較的に稀薄にして、富の産出振はざりしが、十八世紀の後半に於て製鐵事業に石炭を應用するに至りてより英國は俄然富國となれり。千九百七年に於て英國は一ヶ年に約十一億二千二百萬磅の富を産出せり(人口一人當り二十五磅)此數字は單に貨物の生産額の原價のみを含むものなるが故に、國民の収入は勿論是れ以上に上れり。此等の貨物の生産並に勤勞等より生ずる總ての収入は千九百八年に於て約十八億四千四百萬磅に上りたるが、千九百十四年には多分二十一億磅に達するならん。又一方千九百十四年に於ける富の總額は百二十億磅に上るならん。是れは土地及び有形資本の價格に非ずして其生産力を基礎として算出せる見込價格なりとす。此外英植民地に投資せる額は十七億八千萬磅にして、其他諸外國に投資せる額は十九億三千五百萬磅なり。共に千九百十三年の統計)而して一ヶ年の富の蓄積は三億磅ならんと思はる。

此巨額の富の産出は永遠に持續せらる可きか。今英國が大富國と爲りたる原因を尋ねるに、其原因が農作物にも非ず鐵物にも非ず、綿織物毛織物の原料にも非ずして、實に工業用の燃料たる石炭に在るを知るなり。千八百七十五年迄は英國は世界に於ける石炭の全産額の約一半を年々産出せり。然るに千八百八十五年には英國の産出額は世界全産額の四割に

下り、同九十五年には三割三分となり、今や僅かに其二割五分を出すに過ぎず。千八百七十五年に於ける英國の産額は合衆國並に獨逸産額の合計よりも遙かに多量なりしが、千九百十一年に於ては英米其位置を轉倒して米の産額は遙かに英國の上に在り。加之、今日の供給率にして維持せられんか、英國の炭礦は約百七十五年後に空虚となるに至る可し。若し果して然らば、英國々富の將來は暗澹たるものなりと謂はざる可からず。石炭は現今に於ける富の大量生産に不可欠的の要素なるを以て、假りに一世紀半後に於て石炭の供給杜絶するとせば、英國は再び一世紀半前の如く貧國とならざるを得ず。

現代の國民は一世紀半後に現出す可き此状態に對して豫じめ備ふる所なかる可からず。動力調査委員會を起して石炭の節約を奨励せしむるは其一策なり。公債を償却して未來の國民の負擔を軽減するは是れ又現代の國民の義務なりとす。又將來石炭に代る可き動力の發見又は發明せられたる曉に於て英國民をして他國民との競争に堪へしむる爲めに教育を益々普及するの要あり。云々。

K. Asakawa: The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan, (Reprinted from the American Economic Review, Oct. 1911)

西洋とはまだ交通の開けなかつたその昔、我が國で恰も泰

四に見るが如き完全なる發達を遂げた封建制度は、その微細の點に立入らば彼此各特異の點を存するのであるが然もその大綱に至つては驚くべき類似せる原則と條件との下に行はれたものである。その比較研究を行ふのは法制史經濟史の研究に志すものに取つて多大の興味ある事柄である。昨年末の「阿米利加史學評論」の冒頭を飾れる表題の新研究は、「大化改新(明治三十七年三月)及び K. Asakawa, The Early Institutional Life of Japan, A study in the Reform of 645 A. D. Tokio 1913 の出版以來絶えず本邦の法制を研究せられてゐたエール大學助教河貫一氏が此の目的に向つて努力せられたものであつて遠からず發兌せらるべき氏の著述の概論たるべきものである。先づ筆を起して、

我が國太古の制度は所謂氏の制度であつて天皇は理論上、日本民族全部の長であらせらるゝけれども實際上では皇權は主として皇族の各員とその部曲の民及びその土地の上に存してゐた。地方分權の勢が隆盛となるに従つて、「氏の上」の中には急速に權勢を得て殆ど帝權をも凌駕せんとするものを生ずるに至つた、これ實に氏の制度に特有なる危險であつて遂に大化の改新を促すに至つたのである。而して支那の巧妙なる國家社會主義の一制度を換骨脱胎した大化の改新も致細に之を研究すれば氏の制度のうちに、歲月の久しきに亘らば自

滅に瀕すべき要素を含んでゐるのであつて且當時の土地と人民の全部を悉く含んでゐなかつた、即ちその人民について言へば新政府の官吏はもとの家長貴族と全然同一の人を以てしたので私情より國事を見るの舊習を容易に脱却するを得なうだ、故に公地公民の原則は到底實行不可能であつて加ふるに新制度に於ては自由民は相互の上に公權の使用を許さないといふに止つて自由民間の階級の差別を除き或は不自由民を全廢せんとはしなかつた口分田に對して貢物を拂はず國家の支配を受けぬ民も存してゐた。第二に、土地均分の原則は概して實行せられた、これは主として帳簿上の調節に依りたれば世人の思惟するが如く實行の困難なものではなかつたが官憲が賣買賃入に依る權利の移轉を許可したるは本制度の致命傷であつた、又班田以外の登記洩の田地も尠からず存したのである、故に田地の均分を基礎とする國家の制度が殘部の土地の發達のために必ずや纏て頓覆を見るべきは明々白々なる所であつた。加ふるに貴族と不自由民との不輸租田并に寺院の貪慾なる兼併の弊を考ふれば改新國家の斯くも短命なりしは怪むに足らない。その失敗よりして封建制度は生れたのだ(摘要)

以上は本論に進まんがための序論に過ぎないけれども氏の論鋒と着眼の鋭利なるを察する事が出来よう、而して本論に

る封建制度の漸次の發達は、一、莊園の發生發達と二、武士階級の勃興して莊園を支配するに至る経路を叙述するのであるがその第一の點は氏の最も得意とする研究らしく極めて複雑錯綜せる問題を捕へて僅々數頁の中に快刀亂麻を斷つが如く巧妙に概括せられた、これまた邪書にも見ざる處である。曾て斯界の先驅となつた福田教授の著述といひ今又朝河氏のそれといひ何づれも外國に於て外國文を以て發表せられたものに名論卓説を見るのは吾人をして言い難い興味を備さしむるのである。予は本論文に多くの論據を興へたと推せらるゝ中田博士の諸論文及び昨年出版せられた文科大學紀要第一「社會領性質の研究」の讀者は必ず本誌を併讀せられん事を勧めたい(まなせ)